

川崎洋

『川崎洋詩集』から



川崎洋氏（1930年～2004年）

目次

はくちょう	2
にじ	3
風にしたためて	4
往復	5
日曜日	6
こもりうた	7
こちらへどうぞ	8
ひどく	8
鳥	10
鉛の塀	10
付記	11
著者略歴	11

はくちよう

はねが ぬれるよ はくちよう

みつめれば

くだかれそうになりながら

かすかに はねのおとが

ゆめにぬれるよ はくちよう

たれのゆめに みられている？

そして みちてきては したたりおち

そのかげ が はねにさしこむように

さまざま はなしかけてくる ほし

かげは あおいそらに うつると

しろい いろになる？

うまれたときから ひみつをしっている

はくちよう は やがて

ひかり の もよものなかに

におう あさひの そむ なかに

そらへ

すでに かたち が あたえられ

それは

はじらい のために しろい はくちよう

もうすこしだ

しきやうに になつてしまふぞうだ

はくちようよ

にじ

草の中にたたずんでいると

「あの人と貴方は結婚しよう

と考えていらつしやいますね」

とゆう

「ええ」

と答えると

それでは

といて 空に

見事なにじがかかった

風にしたためて

眼がさめると少年は

ろうたけた藤色に透けていた

そんな物語りの始まりのような

或る涼しい朝に

風にしたためて

いくつかの山や川を越えて

村を越えて

白い柵の向うで栗毛の馬が

悪戯な子に麦藁帽子を噛まされて

大変迷惑千万な

そんな風景をずんずん越えて

せきれいのように越えて

とある家の

くるみ色に明るい窓をくぐって

あのやさしく美しかった人へ

こうして

風にしたためて

往復

道で子供が草を握って笑っている

怖い魚の人さらいの夢をみたよ

と喋って笑っている

羊が振返り

朝の霧が山を越えてわんわん溢れてくる

しよっちゅう何か歌がきこえてくる

刈草の積山の向う側にまわると海が見える

其処でホックがはずされる

白い健康な内股をこえて遠く海が見える

やがて海は見えなくなる

僕の胸の下で女の乳房が形を崩すので

羊や海や草のように

僕も女もずっと昔から続いてきた

星から光が棒で僕達に届いているように

僕の下に居る女の眼には

縞のようなものが

網の目のように非常に細かく

眼の奥の方へ深く拡がっている

僕をみつめるそのずっと向うの奥の方まで

ずっと昔から続いてきた僕達は

今互いに往復する

女が昨日見た景色に僕がその前日読んだ本の

活字が重なる

もう直ぐだもう直ぐ僕は
ずっと昔から続いてきた僕を
女の見えない内部へ送ることが出来る

日曜日

朝起きたら
壁から猟銃をとって
食卓の上の珈琲を射ち
それからゆっくりあくびをする

海へ入る
波の上に仰むいてひっくり返ると
顔の面と無智な足の指達がひよっこり
海の上に出る

すると
背中はまだ眠ってしまっているのかしらと
おずおずし
ももはどうすればよいのかわからず
手だけは勝手知ったふうになしづつ
わすれずに海を掻く

海を出る
岸で等身大の魚を肩からかつぐ

ひとゆさりぬるぬるの重さをゆすりあげる
未だ生きている魚の身体は時おり
びゅんとしなるので僕は思わずよろめき

固く反った乳房の娘が向うから来る

僕は魚をほうりだす

僕はちんぽを結んだ藁をとる

こもりうた

あかんぼは

うすめをあけて

うわめづかいなど

するもんじゃない

ねむりなさい

ここはおやじとおふくろに

いつさいまかせて

わるいやつがきたら

とうさんとかあさんが

ちゃんとしまつをつけてやるから

ねむりなさい

すこしぐらいいびきかいたって

やっときこえるぐらいの

いびきなんだから

えんりよすることない

ねむりなさい

こちらへどうぞ

あなたの眼をどうぞこちらへ

みっしり生えた金色の毛が

少しづつ振れて

風に吹かれている方へ

虎の首の下 前肢附根のあたりへどうぞ

ずうーっどうぞ

あなたの風邪をひいた鼻をどうぞこちらへ

じゃぶじゃぶ湿った虎の鼻の切込の中

の方へどうぞずうっっどうぞ

あなたの

時々水浴なんかする

萎びたパンのようなお尻をどうぞこちらへ

満月のような虎の顔の前へ

ずうーっっどうぞ

ひびく

なんだろう あれは

とおくのほうを

たいへんな はやさで はしるのは

ずうっつと ずうっつと

とおくのほうを

めったやたらに ぶんなぐられて
からだ が ちぎれちぎれ に
なっているような
ひくいひくい おとを たてて
いるような
むやみに はやい
むかしのともだちが
おそろしい め に
あっているのだろうか
いまわしい きおくというきおくが
もう とめようがない つよさで
こちらにむかって
はしりだして いるのだろうか
あるいは
はな を どっさりつんだ くるまが
ひきさかれながら
みように わらったり している
ところなのか
むやみに はやい あれは
ひどくとおくのほうを

鳥

鳥を歌おうとおもう

もつとも素朴に

まず くちばし

つばさ

どうたい

足

しっぽ

眼

それだけでいい

それだけで

鳥は飛べるのだから

鉛の塀

言葉は

言葉に生まれてこなければよかった

と

言葉で思っている

そそり立つ鉛の塀に生まれたかった

と思っている

そして

そのあとで

言葉でない溜息を一つする

〈付記 収録詩篇〉

『川崎洋詩集』（一九六八年・国文社）から

川崎洋（かわさき ひろし）

一九三〇年、東京に生まれる。主な詩集に、『はくちよう』（一九五五年）、『川崎洋詩集』（一九六八年）、『食物小屋』（一九八〇年）、『魚名小詩集』（一九八四年）、『ビスケットの空カン』（一九八五年）、『EMクラブ物語』（一九九二年）、『不意の吊橋』（一九九七年）など。ほかに、『悪態採録控』（一九八四年）など著書多数。